子どもレポート

～全国子どもアンケートから見える子どもたちの声とコラムから読み解く社会への問い～



本レポートは、「広げよう！子どもの権利条約キャンペーン」の取り組みの一つである「子どもメガホンプロジェクト」の活動として作成しました。

▼子どもレポートは、こちらのQRコードからご覧いただけます

第1章 子どもの意見表明（グループ1） P7～P52

種別 / タイトル / 執筆者	内容要約・提言
【レポート&コラム】 The Right to be Listened and Taken Seriously こっとん・わかな（P.8～P.27）	多様で複合的な困難を抱える子どもの権利を擁護していくためには、子どもの声が確かに聴かれ、また、子ども自身が安心して声を上げることのできる環境を整備することが不可欠。 同時に、周囲のおとなが子どもの権利や意見表明権について正しく理解し、実践の中でそれを尊重する姿勢を持つことが欠かせない。 そのためには、子どもの権利に関する普及啓発、多様なアクター間の連携強化、国規模での独立したコミッショナーの設置など、制度的な整備と具体的な実践の両方が求められる。

種別 / タイトル / 執筆者	内容要約・提言
【コラム】 **子どもの声を聴くことは、優しさではなく「権利」である** あっきー（P. 28〜P. 37）	懸命に今日を生きている子どもたちが抱えている「もやもや」や「どきどき」は、おとなが求める具体的な結論には形を変えようのない唯一の感情。その子どもの声をおとなが聞くことは、子どもの“権利”そのものであり、不可欠なもの。 子どもにとっての誰かの「だよね！」という言葉こそ救いであり、自分が新しい扉を開こうと思う原動力になる。
【コラム】 **子どもの意見表明** きみこ（P. 38〜P. 52）	「全国子どもアンケート」の結果を踏まえた、子どもが安心して相談できる仕組みにするための提案： 1. **相談の入り口のハードルを下げる** — 気軽につかってもよいと思える窓口を整える。 2. **相談の不安を減らす仕組みをつくる** —「相談したらどうなるか」が事前にわかるようにする。 3. **学校の外にも相談できる** — 学校の外にも相談先があることを、子どもにわかる形で伝える。 大切なのは、窓口の数を増やすことだけでなく、子どもが「ここなら話しても大丈夫」と思える環境や関係性をつくること。 子どもの意見表明は、日々の学校生活や社会の中で保障されるべき権利。子どもが安心して声をだせる環境を整えることは、おとなが果たすべき責任の1つだと私は考える。

第2章 学校教育と教育格差（グループ2） P53〜P62

種別 / タイトル / 執筆者	内容要約・提言
【レポート】 **学校生活と教育格差について** るり（P. 54〜P. 59）	**＜全国子どもアンケートの結果から分かったこと＞** ● 家庭の経済状況によって、学校生活の質や、教育格差に対する意識が変わってしまう。 ● 困りごとを解決したいと思っていても言い出せる環境がなく、困っている子どもたちがたくさんいる。 **＜提案＞** ● 経済的な支援が供給されるような制度を作る。 ● 子どもたちが発言しにくい状況でも、子どもたちの意図が汲み取れるような理解あるおとなが増えるような制度を作る。 **＜提案による効果＞** ● 家庭の経済状況が良くなり、子どもたちにとって勉強の機会が増え

種別 / タイトル / 執筆者	内容要約・提言
	る。 ● 今まで悩みを打ち明けられずにいた子どもたちにとって、相談することのハードルを下げることができる。 **⇒ 長期的に見れば、子どもの健全な学校生活を守り、教育格差を緩和できると考えられる。**
【コラム】 **「こどもまんなか社会」を学校から。ルールを変える体験を、社会を変える力へ** ゆたか（P. 60）	**「学校内民主主義の制度化を」** 子どもたちが身近なルールを自分たちの手で、おとなと議論しながらお互いの納得のいく形で変えていく、そのプロセスこそが、立派な教育になるのではないか。 **「子どもたちの声を社会を変える力に」** 子どもたちの思いや意見におとなが耳を傾け、子どもたち自身が先生や周りの人々と対話を重ねていくことこそが、社会を変える力へとつながっていく。おとなの役目は、それを支える環境を作ることだと思う。

第3章 子どもの心と体の健康（グループ3） P63〜P95

種別 / タイトル / 執筆者	内容要約・提言
【レポート】 **「言葉にならない声」を解読し、おとなと社会へ届ける提言** つむつむ・みどり （P. 63〜P. 74）	**「意思決定の場への子どもの参加」** 自分の意見を言う状況はあっても、最終的な決定の場面にいられないことが多い。最終的な意思決定の際に、子どもが当たり前に参加できる状態を作ってほしい。 **「参加者の過半数を子どもにする」** 決定する時に子どもが「いやだ」と思うことが通されないようにするため、過半数が子どもである状態を担保してほしい。
【コラム】 **子どもコミッショナーについて** ちさ・もか（P. 75〜P. 77）	私が自分の経験から伝えたかった叫びは結局今も無視され続けています。 なぜなら、日本には子どもの声に寄り添って最後まで手を放さずに解決してくれる専門機関＝子どもコミッショナーがないからです。 今も子どもコミッショナーと子どもオンブズパーソンについて日本の子どもとおとなだけでなく、国連・子どもの権利委員会の皆様のお力も貸していただき、私のように声をころされる子どもを1人でも減らしたいです。
【コラム】 **孤立と傷つきを見逃さない〜本当に**	**「子どもの声に「実効性」を」**

種別 / タイトル / 執筆者	内容要約・提言
子どもの声を聴く社会とは〜 とまよ（P.78〜P.95）	● **相談対応の明確化を：**声を聞くだけであやふやに終わらせず、問題をきちんと表面化させ、具体的な解決策と回答をできるようにはっきりと制度化する。 ● **信頼の再構築：**「訴えれば社会は必ず動く」という成功体験を子どもたちに提供し、学習性無力感を打破する。 **「保護者や相談員の「余裕」を守る」** ● **生活基盤の支援：**保護者の労働環境や生活環境の改善に直接的なメスを入れる。おとなが過度なストレスから解放されなければ、家庭内に対話は生まれない。 ● **一体的な権利保障：**子どもの権利を守ることと、保護者の生活を支える社会的仕組みを同一線上で整える。 ● **相談員の働く環境やスキルの向上：**ケア労働者の労働の過酷さや低報酬の是正。アンケート調査や試験、教育を通したスキルアップで質の向上を。

以上